

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	徂く春
Author(s)	有働, 逸男
Citation	龍南, 186: 41-42
Issue date	1923-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8647
Right	

芳草や陽だまりにある塵捨場
うららかなやむに影あるま午庭

徂く春

有働逸男

新緑の河岸しに雨降る燕哉
風落ちてしらくと照る畑面哉
梅の實の落つる夜音や客心
葉櫻の風に咳して火夫の老
猫の子の親にはぐれし寒さ哉
徂く春や寝ざめ老の眼はうけがち
鶏赤く夕東風に佇たつひなび哉
夕東風に大ゆるぎして蚊の行く
雨にひせぶ阿吽の像や羽抜鳥
行く春や廓の町を小守達
的ねらへば露草ゆる小虫哉

風ボカど來れば移りぬ羽拔鳥
 友病める小窓いぶして毛虫焼く
 夕焼けの下の漁村や行々子

三味の音を聞く

徂く春を無心に婆が爪弾き

寂しき一路

山 本 晋

或る著者が次の様なことを云つてゐる。「私共の感ずる淋しさは、色々の原因から來るものがあつて、其の深淺にも差が多いが、大体之を二種類に分つことが出来る。一は對象によつて癒され得る淋しさであり、他は對象によつて癒されない淋しさである。」と。

女の愛、富、名譽、地位、子供、それらを求めて與へられぬ時に起る淋しさ、惱みは、前者であつて、之は意識的にせよ、無意識的にせよ、明かに對象によつて慰められ得る可能性を多分に有するものである。美しい妻を得、豊かな地位ある家庭を作つて、子供の二三人も生るれば大抵の人は、其の淋しさか